

出雲神道と国家神道

原 武史

はじめに

一九八九年に昭和天皇が死去し、代替わりがあつて即位礼や大嘗祭などがありまして、そのような時代状況のなかで記紀神話に関する関心がかなり高まつてきたように思うのですけれども、そのなかで新しい研究が幾つか出てきました。

代表的なのは水林彪さん（東京都立大学）、神野志隆光さん（東京大学）のお二人で、九〇年代に入つて次々と新しい学説を出されています。

ただ、特に水林さんの研究を見ますと、かなり『古事記』の方にバイアスがかかった研究をされているような印象を受けます。つまり別個だというあまり、『日本書紀』というのは本書と一書から成っているのですけれど、『古事記』のような統一的な構成になっていない『日本書紀』というのは、単なる資料集だということ、それだけで退けてしまうような傾向が強いのではないかと。『古事記』の神話を高く評価するあまり、どうも『日本書紀』に対する目配りというものが必ずしも十分に行き届いていないように見えるのです。

そうすると、二人がともに批判している津田左右吉と比べてみますと、津田のほうが少なくとも『古事記』にせよ『日本書紀』全体にせよ、相当万遍なく視点が行き届いているという点に関しては、彼らよりも実はレベルが高いのではないかと印象を受けます。特に津田の場合、『日本書紀』に対しては本書だけでなく一書、本書の後にそれとちよつと違ったストーリーが幾つか入っていてそれを一書というのですが、その一書に対してはきかちんとした目配りをきかせていて、

実はこの二人は互いを攻撃し続けているすさまじい仲ですが、二者に共通しているのは、神野志さんが先ですけれども、記紀神話といういい方は間違っているのではないかと、つまり『古事記』と『日本書紀』というのは中身が似ているので同列に論じられることもあるのですが、もともとは全く別個の神話体系を持っている、であるからには全く別の物語として研究する必要があるという説を述べておられる点にあります。こうした二人の主張には正しい側面があると私も思っています。

かなり詳しく言及しているわけです。

ところが、水林さんや神野志さんの研究というのは、せいぜい『日本書紀』の本書には触れるけれど、一書になるとあまり言及しない。『日本書紀』は本書だけ読んでいればわかるというような印象すら受けるわけです。

しかしながら実際には、十八世紀の後半に国学が台頭してきて、十九世紀の末にいわゆる国家神道というもの、ものが確立していくまでの百年ぐらゐの間というのは、国学にせよ復古神道にせよ、一番関心の的となるのは『日本書紀』の一書なのです。これは国学を大成したといわれる宣長といえども例外ではないと私は考えていますが、実はこの問題というのは、『日本書紀』の一書の、もつといえはオオクニヌシ（天國主神）の「国譲り」の場面ででてくる「顕」と「幽」という概念をめぐって様々な議論が繰り広げられていくのです。そのなかで、神話研究が積み重ねられていく時代であつたのではないかと。とするならば、なぜ今の神話研究が『日本書紀』の一書を不当に低く見ているのか、どうも良

くわからないわけです。

一 「顕」と「幽」

前置きはこのぐらいいにして、「顕」と「幽」とは一体何かという話に入りたいと思います。

資料を見ていただきますと、ここでは国譲りに関する『古事記』と『日本書紀』一書の記述を対比的に並べてみたのですが、オオクニヌシという神が国作りを地上で、『古事記』の場合だとスクナビコナ（少名毘古那）という神と共同でやっているのですが、オオクニヌシというのは『古事記』あるいは『日本書紀』の本書の場合では、高天原から見るとあくまでも邪神の頭領に過ぎない。だから、高天原から正しい神、つまり天つ神（アマツカミ）が降りてきてオオクニヌシを退治すること、正統的な神が地上をも同時に支配するという物語が展開されていくわけです。

ところが、『日本書紀』の一書第二というのを見てみますと、実はオオクニヌシはすんなりと天つ神の要求に応じたわけではないという書き方になっているので

す。オオクニヌシは、この一書第二では大己貴神と書いてオオアナムチと読むのですが、オオクニヌシの別名です。オオクニヌシには色々な別名があります。

オオクニヌシは自分がこれだけの国作りをやって業績をあげているのに、天つ神の態度はあまりに尊大である、おまえたち二柱の神は自分の国を奪いにやって来たのではないかと疑うわけです。この二柱の神というのは、『日本書紀』ではフツヌシ（経津主神）とタケミカヅチ（武甕槌神）という香取神宮と鹿島神宮の祭神なのですが、この二神が使者として遣わされてやって来たのをオオクニヌシが疑って、その疑ったことに対して二神が一旦高天原に帰って、タカミムスビ（高皇産靈尊）という高天原の司令塔の役割を果たしている神に報告するわけです。それに対して、もう一度タカミムスビが二神を遣わしてオオアナムチに曰くというところですが、「今、汝が所言を聞くに、深く其の理有り。故、更に条にして勅したまふ。それ汝が治す顕露の事は、是吾孫治すべし。汝は以て神事を治すべし」と述べています。

ここに「顕露の事」と「神事」というのが出てきます。その次の「大己貴神報いて曰さく」という中にも、「顕露の事」と「幽事」という対比がなされているわけです。「顕」と「幽」という言葉は、ここから出てくるのです。

それと同時に、『古事記』の方では葦原中国を「うしはける」となっています。「うしはく」というのに対して「しらす」という言葉が対比されているのですが、『古事記』においてはオオクニヌシの支配というのが不当な支配であるということが、「うしはく」という言葉を通して浮かび上がるわけです。

それに対して、「知らず国と言依さしたまひき」とある、つまり天皇が治める国といういい方になります。この「知らず」といういい方が、「うしはく」とは違って正統的な支配という意味になるのですが、これは例の有名な大日本帝国憲法の第一条で、井上毅が最初「大日本帝国は万世一系の天皇これを治す」とあえて表現した箇所につながってきます。

ところが一書第二の方を見ますと、国作りによるオ

オオクニヌシの支配が、タカミムスビによって「しらす」という同じ言葉で表現され、それが天皇の支配と同じ言葉として使われているということがうかがえます。つまり一書第二では、オオクニヌシの支配が正統的なものとして天つ神に承認されていることがわかるわけです。オオクニヌシがそのような支配をしている以上、『古事記』や『日本書紀』の本書のように、邪神として退治するというような図式にはなりません。オオクニヌシが「顕露の事」を天皇に譲る代わりに、もうひとつの領域である「幽事」の支配をタカミムスビがオオクニヌシに対して全面的に委託するという、ある種の交換条件としてこういう台詞が出てきていることがわかります。

このように見てみますと、『日本書紀』の一書第二の記述というのは、『古事記』とも違うし、『日本書紀』の本書とも大幅に違った中身になっているということがわかるのです。ここが非常に問題になってきます。

問題になってくるのは、宣長が『古事記伝』を完成させていく十八世紀後半になってからなのですが、し

しかしそれ以前にあつても『日本書紀』の注釈というのはなされてきたわけです。宣長が『古事記』を取り上げる以前は、『日本書紀』のほうがいわば正史として重視されていたわけですが、この『日本書紀』の注釈書として、室町時代に当たる一四五五年から五七七年に、一条兼良という人が『日本書紀算疏』を著しています。これを見ても、――「顕露の事は人道也。幽冥の事は神道也。二道は猶ほ昼夜陰陽のごとし。二にして一たり。人顕明之地に悪を為さば、即ち帝皇之を謀し、悪を幽冥の中に為さば、即ち鬼神を罰す」という記述があります。これは要するに、「顕」とは政治・祭祀であつて、それに対して「幽」というのは「鬼神之を罰す」といういい方がなされていますように、鬼神による賞罰というニュアンスが入っています、ここに一つの宗教的な解釈というものが顔を出しているように見えなくもないわけです。

二 宣長と篤胤

十八世紀後半になると、本居宣長が『古事記伝』を

ライフワークとして完成させていくわけですが、宣長という人は、必ずしも通常いわれているように『古事記』だけを絶対的なもの、事実として信じ、『日本書紀』を漢意が多分に含まれた不純物として排除するといった単純な見方をしているわけではありませんでした。特に『古事記』のオオクニヌシの国譲りの箇所になりますと、宣長はわざわざというか、全く相反する『日本書紀』の一書第二の箇所をそっくり引用してきて、「顕」と「幽」に関する解釈を展開しているのです。

それは『古事記伝』だけではありませんでした。宣長は初心者向けの『神代正語』という神話を新たに書き下ろしているのですが、そこにも国譲りのところだけは『日本書紀』のこの該当箇所をそのまま引用しています。

いというような積極的な主張までしているのです。

それと同時に注目されるのは、宣長が晩年になると出雲大社や出雲という場所に対して深い関心を寄せるようになることです。最近、出雲大社で大きな柱が出てきてニュースになりましたが、今までは二四メートルといわれていた神殿の高さが倍の四八メートルあるという可能性が出てきたとして話題になりました。その柱の設計図を彼は『玉勝間』のなかでそっくりそのまま書いてある所がありまして、出雲大社には相当な関心を持っていることがわかるわけです。

宣長の晩年には、千家俊信という人が門人として新たに加わりますが、この俊信は出雲国造、すなわちアミノホヒ（天菩比神）という神から連綿と続くとされている神の子孫の実弟にあたる人物で、宣長と頻りに文通をしています。また俊信は宣長の住む松坂（現・松阪）を訪ねていますし、相当この両者の間にはやりとりが交わされたようで、俊信は宣長の「顕幽論」から多大な影響を受け、自ら書物も著しております。このような宣長の晩年の姿というのはあまり注目されてい

いのですが、出雲神道を考えるうえではかなり重要な要素ではないかと考えております。

しかしだからといって、宣長は『古事記』を第一に重視すべきだという原則自体を崩したわけではなく、そこは終始原則を保っています、どれだけ『日本書紀』一書第二に注目を示そうとも、あるいは『出雲国風土記』に関心を示そうとも、やはり『古事記』を第一に重視する原則は守っているわけです。そういう既存のテキストを忠実に注釈するという国学者としての立場は終始保持していました。

これが篤胤になると崩れていくのです。平田篤胤という人はいかがわしい噂があつて水戸学者たちには嫌われていましたし、戦後も和辻哲郎などが盛んに攻撃をしましたので、未だに学者の名に値しないという見方が定着していると思うのですけれども、私の考えでは必ずしもそうとはいえないと思っています。篤胤は確かに宣長の没後、門人を自称しました。本当はそれは嘘だったということが今ではわかっていまして、そこからいかがわしいというレッテルが貼られてしま

ました。

篤胤は、『^{みはしら}霊の真柱』のような書物を記す前の段階で、密かに『本教外編』という本を著しています。これは後になって発見されたもので、村岡典嗣さんなどが研究されていて相当長い研究の蓄積があるのですが、篤胤が『天主実義』などのイエズス会士の著した本をもとに、独自の「幽冥界」という概念、あるいは天国地獄説を取り入れているということが明らかになっています。ここで初めて「幽冥界」という概念が死後の世界という意味で使われるようになるのですが、しかし篤胤はそれを全面的にキリスト教から刺激を受けて取り入れたわけではなくて、実はここに出てくる「幽」という文字は、同時に『日本書紀』の一書第二にでてくる「幽」という字でもあるわけです。篤胤はもちろん宣長を尊敬し、彼の中には国学者としての側面とキリスト教からの影響の両面が考えられるのですが、そこから『^{みはしら}霊の真柱』という国学から宗教へと踏み出す新しい思想書を著すのです。

『^{みはしら}霊の真柱』という本は、尊敬する宣長の説をかなり

批判しています。その一つは、宣長の死に対する解釈への批判となつてあらわれました。宣長は、人は死ねば必ず黄泉の国へ行く、それは悲しいことだがそれ以上死について語ることはできないということで判断を停止してしまっています。

ところが、篤胤の場合はそうではなく、人は死後黄泉の国に行くのではなく実は人の靈魂というのは死後もこの地上世界に留まり続けるという解釈を出しています。それが「幽冥界」というところで、我々の世界からは見えないけれども、生前の見える世界を意味する「顕明界」と同じ地上にあるのだ、だから死というのは「平行移動」するだけで、宣長のいうような黄泉という地下世界に落ちるということではない、という解釈をしていくのです。そしてさらに、「顕明界」では天皇が確かに支配しているが、死んで見えない「幽冥界」に行ってしまうと、そこではオオクニヌシが支配しているといっているわけです。これは明らかに『日本書紀』の一書第二の記述を踏まえています。

そうすると、オオクニヌシが邪神の頭領ではなく、

イザナギ（伊邪邦岐命、伊邪諾尊）によって支配の依託を受けた正統的な神であることを証明する必要が出てきます。そのためにはスサノヲ（須佐之男命、素戔嗚尊）の評価も同時に改めなければなりません。つまり宣長によれば、スサノヲというのはアマテラス（天照大神）に対比すべき悪い神なのです。アマテラスというのは良い神で、スサノヲというのは生まれたときからずっと悪い神であった。だから彼が暴れたりするのは生まれながらの性格で直しようがないという見方になるわけですが、篤胤はそういった解釈は取りません。それはスサノヲが悪いのではなく、スサノヲについていた禍津日神という別の神が悪さをしたのであって、スサノヲ自身の性格ではないというのです。

『古事記』でも『日本書紀』でも、イザナギがその両目と鼻を洗ったときにアマテラスとツクヨミ（月読命、月夜見尊）、スサノヲという三柱の尊い神が生まれたという事になっていまして、スサノヲは鼻を洗ったときに生まれたことになっているのですが、宣長によれば鼻から生まれたという出自自体からして悪いという

か、目は良いけれども鼻は臭気を嗅ぐから卑しいのだという宣長ならではの解釈をしています。そういうのを皆ひっくり返して、スサノヲは実は鼻から生まれたのではないとか、篤胤もいろいろと強引な解釈を展開して、ともかくもスサノヲはイザナギからこの地上を正統的に治めよという依託を受けたことにするのです。

そうやってスサノヲやオオクニヌシといった出雲系の神々を前面に出そうとしていきますと、宣長のように『古事記』というテキストを一点一画も崩さず解釈していくという立場はどうしても都合が悪くなるわけです。つまり篤胤は、出雲系の神々が活躍して、国作りをした功績を天つ神から評価され、国譲り後もオオクニヌシが「幽冥界」の支配者になったという神話を作りたいわけです。そうすると、もはや既存のテキストというものを絶対の基準としてそれを忠実に解釈していくという立場ではなく、新しい「古史」というものを作り上げていく必要が出てきます。

事実彼は『古史成文』という書を作ったのですが、要するに『古事記』の中からも『日本書紀』の一書か

らも、あるいは『出雲国風土記』からも、さらにはもつとマイナーな資料からも全部寄せ集めてきて、これぞ真の「古史」だというものを作つたのです。宣長のように極端に言えば『古事記』だけに古の真の日本の姿がきれいに残っているというような主張ではなくて、篤胤によれば、真の古の日本の姿というものは『古事記』のなかにも確かに残っているけれども、それは断片的なものであつて、『日本書紀』のなかにも『風土記』のなかにも同じように残っている、それらの資料をきちんと整合し、一つ一つチェックしながらきれいに並べて一つのテキストにするのだという考えがここには基本としてあるわけで、篤胤が独断的に全く別の神話を作つてしまつたというわけではありません。

ですから篤胤は、どの段の文章はどの資料に依拠しているのかということは全部逐一明記して、まして、それは『古史徴』という本に書かれたことですが、そうやって『古事記』のような天つ神中心の神話ではなくて、国つ神中心あるいは出雲中心の新しい神話、ストーリーというものを作っていくわけです。それを忠

実に一段づつ注釈していったのが『古史伝』というものです。

宣長が『古事記』を既存のテキストとし、それを一つづつ忠実に解釈して『古事記伝』を完成させていったのに対して、篤胤は自分で新しい別の神話を作つてしまつて、同じように一段づつ忠実に解釈していくという作業を、『古史伝』という途方もなく膨大な書物の中で几帳面に展開していくわけです。

この『古史伝』では、オオクニヌシの国譲りの箇所は、結果として宣長の解釈とは相当違うものになってきています。そこでは天皇というのは確かに「顕」という見える世界での支配者ではあるけれども、天皇もまた死ねば「幽冥界」に入つてオオクニヌシの支配を受けるという記述になっています。そうしますと、天皇もまたオオクニヌシの支配下に入るわけです。それから、オオクニヌシの方が天皇よりも構造的に上だという関係にならざるを得ないのです。ここが篤胤神学の孕む大きな問題点になっていきます。つまり宣長の、天照大神がいて、天皇が連綿とその子孫として一貫して支

配者の地位にあり、その系統がずっと続いていることが日本の万国に優れた所以だというテーゼが覆されてしまうわけです。これが後に問題になっていきます。

篤胤が『古史伝』を書き上げた一八二五年という年は、会沢正志斎が『新論』という本を書き上げた年でもあります。時を同じくして後期水戸学といわれる新しい学問が興ってきます。これはもちろん直接には西洋列強が日本を脅かしてきている時代状況のなかで、キリスト教に対抗するために日本で天皇を中心とした祭祀を復興させねばならないという考え方に基づいているわけで、天皇に注目するという点では復古神道と良く似ているのですが、水戸学には「顕幽論」がありません。ですからオオクニヌシ云々という話は一切出てこないのです。彼らは神話を一つ一つ解釈して学問体系を作り上げたわけではないのでそこが違うのです。

それと水戸学の場合は、天孫降臨以前は「正史」ではない、つまり日本の歴史というのは、邪神の頭領であるオオクニヌシを退治してから、アマテラスの孫に、当たるニニギ（邇邇芸命、瓊瓊杵尊）が天から降りてきて、

さらにその子孫である神武天皇が橿原で即位した時点で初めて始まるという話を藤田東湖が展開しています。彼らにとつていわゆる記紀神話の世界、神代の世界というのは歴史ではなく単なる神話であつて、全く論ずるには値しないという視点が強いのです。そこも篤胤などとは全く違うわけです。しばしば水戸学と平田派の国学というのは同列に論じられて明治維新の思想的なバックボーンになったというようにない方がなされますけれども、いまお話ししましたように全然別の思想であると考えたほうが良いと思います。

三 復古神道の三つの流れ

篤胤の樹立した復古神道は、先程いったような問題点がありました。篤胤没後の復古神道は、「顕」に対する「幽」の優越を主張する点では共通しており、そういう意味では宗教的な部分に関しては崩さないのですが、「幽冥界」の主宰神をどの神にするのかを巡って、大きく三つのグループに分かれていくのではないかと思います。というのが私の見解です。

一つは造化三神を主宰神と考える派で、アメノミナカヌシ（天御中主神）、タカミムスビ（高御産巢日神）、カミムスビ（神御産巢日神）という『古事記』の冒頭に出てきてすぐ消えてしまうという謎の神々、とりわけ一番最初に出てくるアメノミナカヌシを同時に幽冥界を主宰している神だと強引に解釈してしまうのが、篤胤の門人の佐藤信淵（のぶひろ）と下総の国学者の鈴木雅之です。

もう一つは、アマテラスを「顕明界」だけでなく、「幽冥界」をも同時に治めた神だとしてしまう人々です。代表的なのは津和野出身の大国隆正で、篤胤の門人でありながら、晩年になると篤胤に対する批判が非常に厳しくなってくる人です。それから黒住教の本多応之助という人がいますが、黒住教は大国隆正を招いたりして交流があるのですけれども、いずれにせよ彼らはオオクニヌシを「幽冥界」の主宰神だとは考えないで切り落としてしまうわけです。そして黒住教に顕著ですが、よりアマテラス一神教になってくるのです。出雲系の神々にあえて触れない、言及しないという立場を取ってまいります。

す。平田派の国学と通常いわれますが、それは決して一枚岩なのではなく、かなり個別的な流れがあつて、この中では二番目に挙げたアマテラスを「幽冥界」の主宰神とする流れが一番水戸学に近いわけです。実際に大国隆正は、水戸学者と付き合ひがありました。

四 明治初期の神学論争

明治維新というのは、王政復古とともに神道が急遽国教に持ち上げられてくる時代にあたるわけですから、ども、ただ注意すべきなのは、当時の新政府に太政官と神祇官という役所が置かれまして、神祇官の方が上位に置かれたのですが、神祇官に採用された人々は、平田派というよりはむしろ津和野派だったという点です。

ここでいう津和野派とは、大国隆正に指導された人達を指しています。具体的には、津和野藩主の亀井茲監（これみ）や、明治初期の神祇行政の中心人物で、後に明治天皇の国学担当の侍講となった福羽美静（よしまさ）が入りますが、彼らがみな大国隆正の指導を受けていた。ということ

これに対して、オオクニヌシをあくまで「幽冥界」の主宰神と考えていたのが、六人部是香と矢野玄道です。この二人はいずれも篤胤の門人ないしは没後門人でありまして、六人部は生前の篤胤と付き合ひがありました。篤胤は生前『古史伝』を公開しなかったのですけれども、六人部とは意気投合して『古史伝』を見せているのです。さらに六人部が写した『古史伝』を矢野玄道がまた写すのです。そうやって秘伝が受け継がれていくようなものですが、彼らは篤胤神学の本質に固執し続けるのです。六人部の場合さらにそれだけではなく、天皇が死んで「幽冥界」にいつて、オオクニヌシによる賞罰を受けて「凶徒界」、すなわち地獄に落ちた天皇は誰かというようなことまで言明してしまいます。仲哀、崇徳、後鳥羽、後醍醐というのはみな悪い天皇で、地獄に落ちたのだというようなことまでいつているわけです。こうなると、もはや国学とはいえないところまでできてしまっています。

このような、大きく分けて三つの復古神道の流れが明治維新当時にあつたということが考えられるわけ

は、当然大国流の神学というものを彼らは信奉していたのであつて、天照大神は「幽」の、天皇は「顕」の支配者であるという見方ですので、出雲系の神々がどうしたなどということは全然出てきません。ですから、平田篤胤とは違った神学が取り入れられているといえるわけです。

こういう新しい神学というのは、しかしながら長続きはしません。津和野派を採用した岩倉や木戸は、大国流の神学を信奉していたわけでは無論なく、最初から政治的理由で採用したことは間違いないですから、適当な時期がくればあつさり捨ててしまいます。一八七二年に神祇省が廃止された時点で、神道国教化運動は事実上挫折し、それ以後は神道と仏教が合同で国民教化運動にあたり、そのための役所として教部省という新しい役所が置かれるのですが、この教部省には津和野派は排除されます。教化運動そのものは継続されても、その担い手が神道と仏教が合同でやろうという話に変わるのです。

国民教化運動のための機関として、大教院が新たに

作られますが、そこで祭られたのは造化三神とアマテラスの四神でありました。この四神だけでなく、オオクニヌシの神も合祀すべきだと主張したのが千家尊福^{なかつとく}という人物です。この人は、第八十代の出雲国造であり、アメノホヒの直系の子孫ということで、生き神様として当時は非常にカリスマ的な權威を、特に西日本一帯で持っていました。

千家尊福は、先程の千家俊信や六人部是香あるいは矢野玄道などの思想的な影響を強く受けていまして、それでオオクニヌシを合祀しないのはおかしいとさんざんいつていたのですが、そのうちに大教院そのものが真宗四派（浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、真宗高田派、真宗仏光寺派）の強い反発を招くようになります。鳥地黙雷の痛烈な批判もあつて真宗は大教院を離脱し、大教院は解散に追い込まれます。この結果、国民教化運動そのものも挫折に追い込まれ、大教院に代わる半公的な中央機関として、神道事務局が東京に置かれることになりました。

この神道事務局に対しても、千家尊福はオオクニヌ

シを合祀しよう主張し続けます。その結果、次第に神道事務局内に造化三神とアマテラスだけではなく、オオクニヌシも合祀すべきか否かを巡っての大論争が明治の十年ぐらゐから次第に沸き起こっていき、明治十三年にピークを迎えます。ちょうど自由民権運動が高まっていつてピークを迎えるのと時期的には同じなのですけれども、もう一つの激しい論争が繰り広げられていくのです。このオオクニヌシの合祀に反対するのが伊勢神宮を中心とする人達で、通常「伊勢派」といわれました。これに対して、オオクニヌシの合祀を主張するのが、出雲大社を中心とする「出雲派」です。

当然、出雲派の連中というのは、平田篤胤以来の神学に則つてオオクニヌシの神徳をさまざまな形で強調していきました。それに対して伊勢派は、大國隆正の神学をもう少しひねつたものとか、いろいろ考え出すのですが、どうしても分が悪いわけです。つまり本居・平田というのは当時絶大な權威があつて、本居・平田以来の流れを無視することはもちろんできないし、それを信奉する人達というのはどうしても出雲派の方

に加担する傾向があつたのです。ですから出雲派の方が教学的には有利でした。

ところが、伊勢派の連中というのは伊勢神宮を拠点としているわけであり、政治的には出雲派よりも権力に近かつたわけです。当時は、出雲派と民権派は同じであり、天皇の權威を蔑ろにしているとか、あるいは千家は不逞の輩だから暗殺しなければならないというようなデマまで広まっていたようです。伊勢派は結局、最終的に出雲派の主張を押さえ込むために、彼らが唱えている「顕幽論」というのは、実は本居・平田がでつちあげた「一家の考説」であり、あれはもともと『日本書紀』の一書第二にしかなく、それを勝手に持ち上げたのが本居・平田なのだといつて退けるという手段に打つて出るわけです。

結局この論争は、一八八一年に天皇によって勅裁が下されるといふ形で片がついて、出雲派が事実上敗北するのです。出雲派が敗北したことは、「顕幽論」そのものが否定されることにつながるわけです。ですから「国家神道」が確立されていく裏には、宣長以来、ある

いは室町時代以来問題となつてきた「顕幽論」をまるごと否定してしまうということがあつたのです。それによつて祭祀と宗教を分離して、「国家神道」は祭祀だけを担当して、宗教というのは教派神道として別個に独立させた。そうすると出雲派が提唱していた考え方というのは、この時点で出雲大社教という単なる一つの教団の主張に過ぎなくなつてしまいます。こうして神道事務局も廃止に追い込まれていきます。「神道は祭祀であつて宗教にあらず」という、明治初期以来福沢諭吉や鳥地黙雷らが盛んに唱えていた主張が、結果的に認められたことになるわけです。

ただそこで見逃してならないのは、ちょうどその時と同じくして靖国神社ができていたという事実です。つまり、「国家神道」の宗教性というものが完全に否定されたわけではなく、全く別の宗教性を濃厚に帯びた靖国神社が出てくるということを見逃してはならないと思うのです。

おわりに

ただ注意すべきは、確かに「顕幽論」は公的には否定されたのですが、それ自体は当初とかなり違った形ですけれど、出雲大社教の教義のなかに取り入れられたことです。

それと同時に、二十世紀に入ってくると、今度はスサノヲに着目する形でもう一つの宗教ができていく、それが大本教団だったのでないかと思うのです。出口王仁三郎という人はかなり初期の段階からスサノヲに着目していて、途中でカリスマ性を持った開祖の出口ナヲにひかれるエリート、知識人が大量に入信して、彼らが一団となつていわゆる大正維新運動というものを實現していく時期があるのですが、これが一九二一年の第一次大本事件によって挫折してしまう。

その後、王仁三郎は教団の実質的なリーダーとなり、『靈界物語』という全八十一巻にもなる膨大な量の物語を口述筆記し始めますが、この物語は明らかにスサノヲを「幽冥界」だけでなく、「顕明界」を含めた全体の

支配者として考えていたところがあるわけです。それが結果的に不敬罪あるいは国体変革を企てるものとして、一九三五年に第二次大本事件が起り、教団本部がダイナマイトによって爆破されるという大弾圧を受けることになりました。

もう一人気になるのは、戦後の折口信夫です。柳田国男も文章の上では篤胤を批判しながら、実際には篤胤流の「幽冥」という考えを濃厚に受け継いでいたと思いますが、折口の場合は篤胤を直接的に評価していたところがあります。しかも戦後になると、彼は「神道人類教」を唱え出します。それと彼の墓が能登一の宮にあつて、ここには氣多^{けだ}大社という神社がありオクニヌシが祀られている。能登と出雲というのは『出雲国風土記』などを見ても非常に深い関係にあるわけです。

あるいは戦後、彼はスサノヲを祀る氷川神社に近い東久留米の自由学園というところを何度も訪問していること、折口が死んだときの葬儀委員長は、氷川神社の宮司で、やはり系図的にはアメノホヒの子孫とされ

る西角井正慶だったことなども重要で、この辺はちょっとまとめてみたいと個人的には思っていますが、要するに折口の思想にまで射程が届いているのではないかというのが私の個人的な実感であります。

【参考文献】

- 原武史『出雲』という思想（公人社、一九九六年、講談社学術文庫、二〇〇一年刊行予定）
同「氷川神社と折口信夫」（『東京人』第十五巻第五号、二〇〇〇年所収）
同「能登・久留米・出雲」（『折口信夫全集』月報三十九、二〇〇一年所収）

（はら たけし／明治学院大学助教授）
（本稿は、二〇〇〇年七月二十一日に行われた研究会での報告内容に、加筆いただいたものです。）